

Community Building and Damages from Earthquakes in Koori-machi, Fukushima: How can Students Contribute?

SAITO, Chie[†]

Abstract

This paper discusses community building in Koori-machi, Fukushima. In particular, I examine the possibility that university students who visit there as a part of their class contribute to Koori-machi and establish mutually beneficial relationships with local people. Koori-machi is a town where local people have actively participated in community building and tried to restore the historical landscape along the old Oshu-kaido Road. University students also took part in this project. They researched the town and offered ideas on the landscape, some of which were incorporated into the plan for community building. However, when strong earthquakes hit Koori-machi in 2021 and 2022, they demolished the old buildings that people were using to attract and treat visitors. As a result, they had to give up restoring the historical landscape. In this paper, I argue that in this challenging situation, students can play a role in community building through activities, such as posting information about Koori-machi and providing new ideas about rebuilding the historical landscape. If their ideas and suggestions are incorporated into the plan, this achievement could motivate students and also help them develop their career direction.

Keywords

community building, disaster, Fukushima, students, related population

福島県桑折町のまちづくりと震災 —関係人口としての学生が貢献できること—

齋藤 千恵[†]

キーワード

まちづくり, 災害, 福島, 大学生, 関係人口

[†] csaito@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

1. はじめに

日本の人口は、2008年に約1億2800万人を数えて以来、減少の一途をたどっている（厚生労働省 2021：3）。労働人口の不足は、既に1980年代から言われており、これを補うための移民政策が論じられてきた。しかし、現在に至るまで、移民についての議論が生じては消えていくということが繰り返されている。その一方で、入管法が改正され、外国人労働者は日本で働き易くなった。古くは、入管法改正により、日系人2世、3世の定住・就労が増加したし、最近では、2018年の入管法改正で、外国人労働者が多様な分野で働くことができるようになった。在留区分として特定技能が追加されたのである（出入国在留管理庁 2022）。こうして労働力不足を外国人で補う政策が進められてきたものの、少子高齢化は依然として解決されていない。

移民政策に舵を切らない日本社会は、今後、少子高齢化が更に進み、消滅の危機を迎える地域社会も増えるだろう。地方再生や地方創生などさまざまな言葉でまちづくりが論じられる中、ついには、自治体間の人口争奪戦を止めようという言葉が聞こえるようになった。こうした声は、関係人口という用語の出現とともに聞こえ始めたのであった。田中は、自治体が定住人口を増やすのは、ほかの自治体から住民を奪うことを意味すると述べる。こうした奪い合いから脱するためにも、地域外の人を関係人口として獲得することの必要性を唱える。地域を担う主体に関して、量的に考えるよりも、質的に考えるべきだというのである（田中 2021：59, 60）。

関係人口とは、2016年に初めてその概念が示され、2018年には、国が当該人口の重要性を唱えるに至った概念である。高橋(2017)は、都市と地方で、それぞれ不足している部分を補完する対等な関係を形成することを勧め、関係人口を、地方の人と人間的な繋がりを持つ当該

地方外から来た人々とする。

また、総務省(2018)は、関係人口とは、定住人口でも観光者でもなく、地域と関わる人々であるとする。総務省は、関係人口を、行き来する人としての「風の人」、 「地域にルーツを持つ人（近居）」や「地域にルーツを持つ人（遠居）」、過去に当該地域に住んでいたことがあるなど、「何らかの関りがある者」の4つに分類する。そして、関係人口は、地域とほとんど関わりがない観光者に代表される交流人口と、地域に居住する定住人口の中間に位置するとする（総務省 2018）。

総務省は、こうして関係人口を定住人口と区別し、関係人口を多様に地域と関わる事が出来る人々と定義しているが、同省が採択した「関係人口創出・拡大事業」を見てみると、少なくない自治体で関係人口を潜在的・顕在的な移住者とみなしていることが分かる（総務省 n.d.）。

田中は、こうした議論を踏まえ、人口減少地域における関係人口の有用性について論じてきた。彼女は、関係人口は、複数の地域に関与できる地域外の人々であると定義する。交流人口のように、一時的な関与に地域が消費され、消耗することなく、主体的に、関係人口との関係を構築していくことが望まれると述べる（田中 2021：59, 60）。

田中は、その議論の中で、さまざまな事例を通して、関係人口と地域の人々による地域づくりを紹介している。その事例の中で目立つのは、関係人口との関係の中で、地域の人々が自分たちこそ地域創生の主体であると認識するようになるプロセスである（田中 2021：294）。

川端・佐藤・宮前も同様に、関係人口と地域の人々との関係の変化に注目し、災害復興過程でのまちづくりに関わる関係人口としての大学教員たちと地域の人々との関わりの深化のプロセスを追求する。個人としての関係人口と地域の人々との関係の変化について注目すること

で、大学教員たちが継続して地域づくりに関わる具体的なあり方を述べている（川端、佐藤、宮前 2021）。

関係人口に関する事例の中で、関係人口と地域の人々との関係は様々である。しかし、いずれにしても、関係人口は、地域社会に属さないことから、地域の人々とは異なる経験を持ち、異なる視点を持つ人々なのである。文化人類学的な言い方をすれば、人にとって、自分の文化は当たり前のもので、空気のようなものであるが、異なる文化に関しては、そうではなく、違いが目に見えるのである。同様に、地域の人々が当たり前のものであり、気づかないことを、外部から来た人々は、気づくことができる。こうした気づきを地域の人々に与えられるのが、関係人口の強みの一つであろう。

本稿で論ずる観光学系の授業に参加して福島県伊達郡桑折町を訪れた学生たちも、当該地域にとっての関係人口である。彼らの視点は、二つの意味で地域の人々のそれとは異なる。一つは、学生たちが、福島県外の出身であり、桑折町にとっては外部者であること、もう一つは、まちづくりの中心となっている人々との世代の違いである。こうした二つの意味で、学生たちは、地域づくりの主体がもつとは異なる視点を持つ。本論では、こうした関係人口としての、大学の授業で桑折町を訪れた大学生たちが、大規模震災に見舞われてきた地域のまちづくりに、どのように関わることができるのかを論じるものである。桑折町は、地域の人々が主体性と計画性を持ってまちづくりを担ってきた地域である。しかし、度重なる震災で、まちづくりに利用してきた古い建造物が失われてしまった。本論では、こうした状況下でも、関係人口としての学生たちと、町の人々は、まちづくりに関して相互に利益がある関係を構築し得、学生たちが、プロセスとしてのまちづくりに貢献する可能性を持つことを論ずる。

2. 桑折町

桑折町は、福島県の北部に位置する町である。その西には県庁所在地である福島市、北には宮城県白石市が位置する。町の面積は、4,297haで、北西部は、奥羽山脈の一部を構成する標高863.1mの半田山を擁する山がちな地形であり、中央部は、そこを流れる産ヶ沢川や佐久間川などの河川が作り出した扇状地である。町の東南には、阿武隈川が流れ、その氾濫原には河岸段丘が形成されている（桑折町政策推進課歴史まちづくり係 2016：8）。



図-1. 桑折町⁽¹⁾

現在の桑折町は、1955年に桑折町、睦合村、半田村、そして伊達崎村が合併してできた（桑折町政策推進課歴史まちづくり係編 2016：13）。この合併の名残が、桑折町の地区名に残っている（図-1参照）。町は、桑折、半田、睦合、伊達崎地区から成り、町の中心は、旧奥州街道が通る桑折地区であって来た。桑折町のまちづくりも、桑折地区中心に計画されている。

桑折町は、桑折地区を通る旧奥州街道と半田地区を通る旧羽州街道という二つの街道を持つ宿場町であったというアイデンティティを持ち、そのまちづくりは、旧奥州街道沿いの景観整備を含んだものであった。また、羽州街道交

流会のメンバーでもあり、同じくメンバーである自治体を訪問し、旧街道を生かしたまちづくりを視察・研究してきた。

旧街道以外に、桑折町が歴史的リソースとしてまちおこしの中で注目してきたものに、西山城址がある。西山城は、仙台藩主伊達氏の祖先の居城であったとみなされており、『塵芥集』を著した伊達種宗が築城したと考えられている。建物は残っていないが、東日本大震災後、柱穴が再現され、また堀があったところが整備された。この城址を巡るツアーも実施され、宮城県をはじめ各地からの参加者を集めている。更に、桑折町は、山城サミット連絡協議会のメンバーでもあり、2021年には、桑折で山城サミットが開催され、仙台から伊達武将隊が応援に駆け付けるなど、山城や伊達氏を巡るネットワークがここに示された形となった。

こうした歴史とともに、桑折を特徴づけるのが、献上桃の栽培である。桑折町は、かつて、桃栽培の北限という地理的位置にあった。現在は、温暖化により、この更に北に位置する地域で桃栽培がおこなわれるようになり、その北限は移動したものの、桑折町は、29年間、献上桃の郷であって来た。また、桃畑だけでなく、町は王林の発祥地としても知られており、桃畑とともにリンゴ畑も広がっている。

こうした風景から、また、桑折町北西部に広がる山地から、農村、中山間地帯というイメージが桑折町について回るが、町内総生産約621億円（2019年）の内、第一次産業は、約17億2100万円、第二次産業は、約381億2700万円と、製造業が大きな割合を占める（福島県企画調整部統計課 2022a: 10）。また、新しい道路の開通による利便性向上で、更なる第二次産業の成長が期待できるのである。

2.1. 21世紀の追分

江戸時代の桑折町は、奥州街道と羽州街道を結ぶ宿場町、桑折宿として栄えていた。また、阿武隈川による水運も当時の運輸・交通手段と

して機能していた。しかし、明治以降、地域を結ぶ交通のあり方が大きく変化した。明治期に入り、旧奥羽街道と羽州街道の分岐点近くに、鉄道の駅が作られ、それ以降、鉄道網が発達した。阿武隈川の水流を利用した水運は、現在では見られなくなり、旧街道は、地域の人々が生活の中で利用する道路と変化した。しかし、旧街道とその合流点である追分は、町を特徴付けるものとして、まちづくりの中に生かされている。

21世紀になり、桑折町は、再び地域と地域を結ぶ要所となった。相馬福島道路あるいは東北中央自動車道が、2020年に伊達桑折インターチェンジから桑折ジャンクションまで開通し、翌2021年には全線開通した。ジャンクション名に、桑折を付けるよう陳情した結果、桑折ジャンクションという名称が実現し、これにより、桑折町は、より交通の便のよい町という印象を期待することができるようになった。このジャンクションは、「21世紀の追分」と称され、江戸時代に多くの人々が行きかかった追分と同様、人や物の流れが桑折に再び戻ってくることが期待されている。

実際、桑折ジャンクションは、福島市と相馬市を結び、また、北は仙台、東は山形、南は郡山や宇都宮を経て東京へと繋ぐ。町は、こうした交通の利便性をセールスポイントに、更に住みやすい町としての桑折をアピールし、人口を獲得しようとしている。

2.2. 桑折町の人口

桑折町の人口は、減少傾向にある。人口のピークは、1985年（昭和60年）で、14,918人であった。その後、人口は下降の一途をたどり、2006年に13,379人になった。東日本大震災の1年前の2020年には、人口は、12,823人（2010年12月31日現在）であり、それが、震災の年の12月には、11,285人（2011年12月現在）に減少している。2015年に一時的に増加したものの、その後は、年々減少するばかりである。

2011年から2年間は、転出人口が多く、2011年には458名、2012年409名、2013年412名であった(福島県企画調整部統計課 2022b)。

一方、転入人口の増加もあった。2011年4月以降、桑折町は、福島県の中で帰宅困難地域に指定された浪江町からの避難者を受け入れてきた。2012年12月現在、仮設住宅及び借り上げ住宅に、416名が入居している(福島県災害対策本部 2012)。しかし、そうした転入人口の増加にも関わらず震災以降、人口は大きく減少していった。

町の試算では、このまま人口減少が続いた場合、2025年には、人口11,000人まで減少してしまい、その後は、更に減少する。町が目指すのは、人口11,000人を維持することである。これを目的に、町は、都市計画を進めているのである(福島県桑折町総合政策課政策推進係 2021: 25-27)。

3. 震災とまちづくり

21世紀に入り、桑折町が経験した大規模自然災害は、いくつもある。中でも、2011年の東日本大震災とそれに続く福島第一原子力発電所事故は、大きなものであった。桑折をはじめとする福島県の自治体の復興は、地震のみならず、放射能汚染と、除染が繰り返し行われたにも関わらず続く風評被害に対応したものであった。桑折町のまちづくりは、復興計画が終わった2016年に再開された。しかし、2021年と2022年には、再び東日本大震災と同程度の震度6弱の地震が桑折を襲ったのであった。これらの震災は、桑折のまちづくりにも影響を及ぼしている。

3.1. 震災

2011年の東日本大震災とその後の余震により、東北地方は大きな影響を受けた。桑折町では、2012年12月4日現在、民間の住居の内49棟が全壊、170棟が半壊、1,082棟が一部損壊という状況であった。死者・行方不明者は0名で

あった。この時点で、浪江町民のための仮設住宅が286戸完成しており、416名を受け入れていた(福島県 災害対策本部 2012)。

桑折町は、浪江町からの避難民を福島県内で最初に受け入れた町である。町の人々は、浪江町の人々と良好な関係を結び、彼らとともにさまざまな活動をしてきた。被災時の様子を紙芝居で伝えてきた浪江まち物語つたえ隊の活動もその一つである。また、2014年に封切られた映画『物置のピアノ』は、浪江町民を含む桑折町に住む人々の復興への意欲や動機付けに大きく寄与した。この映画は、まさに、復興への歩みの中の一步を飾る町の人々のための映画となった。

『物置のピアノ』(「物置のピアノ」製作委員会2014)では、桑折に住む人々が様々な形で活躍している。台本は、桑折町出身の女性が書き、舞台は桑折町である。芳根京子、長谷川初範、平田満、佐野史郎、織本順吉という俳優たちが演技をする中で、町の人々もスクリーンに映し出された。また、出演者や撮影スタッフを支えたのも町の人々であった。スタッフたちの食事を用意したり、舞台のセットとして必要であった物置を建てたのも町の人々であった。DVDには、撮影風景も収録され、そこには、浪江町から避難してきた人々を含む住民たちが撮影に参加し、協力する姿が映しだされている。

こうして、桑折は、東日本大震災の被害から立ち直りつつあったが、2021年と2022年に、再び大規模震災に見舞われた。2021年2月の福島沖地震では、桑折は震度6弱を経験し、全壊家屋6戸、半壊56戸、一部損壊936戸という被害を出した(福島県危機管理部対策課 2021)。2022年3月も同規模の地震が発生し、住居に関わる被害は、全壊6戸、半壊86戸、一部損壊1055戸であった(福島県危機管理部災害対策課 2022)。

2022年の震災後、旧奥州街道沿いの土蔵造

りの建造物のほとんどが撤去されてしまった。このため、かつてそこで催された吊るし雛の展示や町外からの人々を団子汁でもてすこともできなくなった。土蔵を拠点に活動していたことから、土蔵がなくなると、そこで行っていた活動もできなくなっていった。

3.2. まちづくり

桑折町のまちづくりは、東日本大震災以前から始まっている。震災以前のまちづくりでは、江戸時代に宿場町であった桑折が強調されている。2004年には、奥州・羽州街道まちづくり懇談会が設立された。懇談会は、奥州街道と羽州街道の分岐点である追分の再現を行い、また、付近の景観を整備しようとした。江戸時代、追分であった場所には、当時精肉店があったが、立ち退いてもらい、追分を再現したのであった。また、この付近の民家の塀は、江戸時代の雰囲気を出すように、外観に手を加えられている。

こうして2006年に追分が再現されると、翌2007年には、国土交通省手づくり郷土賞を受賞した（福島県県北建設事務所 n.d.）。当時の追分の様子を再現できたのは限定的であったが、それが評価されたのであった。

同じ年、奥州街道沿いに残る土蔵を利用して、桑折御蔵が開かれた。ここには、福島県商店街活性化事業の一環としてのアンテナショップが開設された。桑折町女性団体連絡協議会が中心となり、この蔵を交流もてなしの場として活用していった（福島県県北建設事務所 n.d.）。蔵では、桑折のイベント開催にあわせて団子汁が販売された。この団子汁は、もちろん手づくりで、桑折の郷土食として位置づけられる。協議会の中で、桑折の郷土食は何かと議論された際、以前よく食べられたすいとんが上がり、これが団子汁と名付けられたのであった。すいとん自体は、特に戦争中の日本の家庭でよく食べられたものであったが、桑折御蔵で出されてきたものは、そうした貧しい時代のす

いとんとは異なり、具沢山の料理である。各家庭で、中に入っている具も味付けも異なることから、御蔵でもてなしで、いつも同じ団子汁が出されるとは限らない。まさに、桑折の家庭の味としての団子汁が、提供されてきたのであった。

この蔵は、アンテナショップやもてなしの場である一方、展示の場ともなった。2006年に設立された桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会（福島県県北建設事務所 n.d.）は、この蔵を会場にして吊るし雛展示を行った。東日本大震災後は、難が去るという意味を持つさるぼぼが吊るし雛となった。被災した人々に対する慰めと、復興に向けての人々の意欲、被災した郷土への愛着を込めた吊るし雛は、福島県各地で同様に展示された吊るし雛巡りの一部となった。

更に、2008年には、三元車復活プロジェクトの一環として桑折サイクルフェスティバルが開催された。三元車というのは、明治時代の桑折に住んだ鈴木三元により制作された日本最古の自転車である（福島県県北建設事務所 n.d., 桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会桑折学部会 2010:66）。

2010年には、『桑折学のすすめ—郷土愛を育むために』（桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会桑折学部会 2010）が出版された。この本は非売品で、今まで地元の小学校などで使用されてきた。

こうして桑折町の地域創生が行われる中、東日本大震災が起こった。ほかの東北地方の地域と同様、桑折町も大きな被害を受けた。そして、2011年から2015年まで、町は、復旧・復興に専念することとなった。

2016年になって、まちづくりが再開された（桑折町政策推進課歴史まちづくり係 2016:1）。震災後のまちづくりは、震災前とは大きく異なった状況の中で始まった。町の歴史的資源の維持と活用が特に注目されるようになった

のであった。

2016年に国の認定を受け始まった歴史風致維持向上計画は、桑折町に残る歴史的資源を活用したまちづくり計画である。町は、歴史的資源を生かしたまちづくりの必要性を次のように述べている。

社会的環境や生活様式の変化、人口減少、少子高齢化などにより民俗芸能や伝統文化の継承に今後支障が出るのが予想され、また、空き家・空き店舗の増加によって良好な街並みを保つのが困難になりつつある。さらに、平成23年(2011)3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震では震度6弱を観測し、歴史的建造物を含む多くの建物が被災し解体を余儀なくされた。また、東京電力(株)福島第一原子力発電所で発生した事故による放射能汚染から地域住民避難の影響も大きく、民俗芸能・伝統文化の後継者たる壮年・若年層の人口が急減少しており、後世に残すべき歴史的風致が、今まさに存続の危機となっている(桑折町政策推進課歴史まちづくり係 2016:1)。

東日本大震災から5年後に始まったこのまちづくり計画は、地域の文化や歴史が受け継がれなければならないという思いに立脚している。この計画の中で、町が考える残すべき歴史的情景の代表的なものは、伊達氏に関連する史跡や諏訪神社夏祭りに関わる慣習、西根堰や阿武隈川氾濫原に見られる歴史的な歩み、半田地区に伝わる祇園ばやしといったものである(桑折町政策推進課歴史まちづくり係 2016:48-108)。

さらに、「歴史的風致の維持・向上」の対象として、西山城址の保存と整備、町並み及び景観整備、交流人口増加のための情報発信や古い時代から伝えられてきた活動の継承がある(桑折町政策推進課歴史まちづくり係 2016:109-124)。

地域の人々は、こうした課題に積極的に取り

組んできた。例えば、西山城や伊達氏に関わる史跡巡りのツアーや町の史跡や食に関するツアーなどを、商工会が中心となり実施してきた。2021年には、NHKBSプレミアムで西山城についての番組が放映された。また、山城サミットも行われた。

こうした歴史的なイベントやツアーだけではなく、桑折の特産物での商品開発も盛んに行われてきた。桃のシャーベット、グミ、こんにゃくゼリーや、半田山の水を使って作った日本酒「辛口桑折」が作られた。ふるさとエール桑折が設立されると、桑折の桃やその葉を使った石鯰、「ロイヤルピーチポーク」と呼ばれる豚肉が販売され始めた。「ロイヤルピーチポーク」は、桑折の桃と「辛口桑折」の酒かすを食べて育てられた豚で、豚肉特有の匂いがしないのが特徴である。

こうした製品は、桑折に特徴的な物を意識して作られている。同様に、旧奥州街道や羽州街道も、桑折のアイデンティティを表すものである。近年、商工会は、旧奥州街道沿いの景観整備に関して、若い視点を導入しようと、いくつかの大学の学生たちから提案を出してもらい、考えてきた。町の人々は、旧奥州街道沿いの古い街並みにこだわっていた。

ところが、2021年2月と2022年3月に起きた震度6弱の地震により、街道沿いの景観の一部として利用されてきた土蔵が壊れてしまった。土蔵は、壁がはがれただけであったが、竹と土でできた壁を修復する技術が町に残されていなかったのと、建物の撤去に補助が出るため、2022年3月の地震後、旧奥州街道沿いにあった、一見して土蔵と分かる建造物は、ほとんどが撤去されてしまった。いくつかあった土蔵の内の二つが、町民たち、とくに女性団体で行っていたおもてなしの場であったが、それらも撤去されてしまった。

旧奥州街道沿いの景観整備は、商工会や住民たちが、熱心に取り組んでいたが、古く、趣の

ある建造物が撤去された後は、空き地が目立つことになった。こうした事態は、2020年より以前は、予想されていなかったことであった。2011年の大震災で、古い建物のいくつかが使用できなくなり、そのまま撤去されたものの、いくつか残った土蔵は、旧奥州街道沿いの古い街並みの再現に一役買うものと町の人たちは考えていた。古い街並みの再現のためには、街道の上を覆う電線や電柱が問題であり、電線の地中化が待ち望まれていたところであった。

古い建物が、旧街道沿いから時期を同じくしてなくなってしまうことで、旧街道沿いの修景に関しては、今までのように古い街並みの再現という具合にはいなくなってしまう。旧奥州街道は、駅付近にある追分から伊達郡役所に続く、町のメインストリートであり、町の人たちの失望は大きかった。このまま空き地として土地が利用されなくなると、町の景観も大きく変わるだろう。

こうしてまちづくり計画が震災により影響を受け一方で、町役場による都市計画は、着々と進んでいる。人口が集中している桑折地区に限定される桑折町の都市計画⁽²⁾では、商業施設やこども園、グランピング施設の建設を計画している。

まちづくりに繋がる新たな試みは、民間でも行われており、桑折駅近くの旧奥州街道沿いに、シェアオフィスとコワーキング・スペースを持つHatchがオープンした。コロナ禍の中、オンラインで働く人々が増加し、こうした働き方が今後も継続することを見越しての開設である。建物の中には、空き家バンクもあり、ここでシェアオフィスとコワーキング・スペースの使用登録ができる。こうした空間の他に、一階のスペースには、仕事を目的としない人たちが自由に利用できる畳敷きでちゃぶ台が据えられている部屋がある。コーヒーを無料で飲むことができ、また、Wi-Fiも使え、町を訪れた人々が、ゆっくり過ごすことができる空間となって

いる。

こうして、絶え間なく新しい試みが加わる桑折町のまちづくりは、そこを訪れる学生の学びの場ともなる。既に述べたように、桑折町は、さまざまなまちづくり策を実行してきた町であり、そのまちづくりを学ぶことが出来るし、また、学生たちはその若い視点から、提案することもできる。桑折町は、若い人々の提案を受け入れてくれる町でもあった。

4. 観光学系演習授業

金沢星稜大学人文学部では、2020年度より、観光学系の演習授業の一環として、桑折町を学びとフィールドワークの場としている。但し、2020年度は、コロナ禍のため学生たちが実際に訪問することはできず、オンラインインタビューや動画を用いてのフィールドワークで代替している。

4.1. 2020年度の演習

2020年度は、桑折の人々が古い街並みを残す金沢に大きな関心を持っていたこともあり、古い街並みが演習のキーワードの一つであった。学生たちは、金沢市内の旧北國街道沿いの街並みを見学し、その上で桑折の旧奥州街道及び羽州街道沿いの街並みの映像を見て比較分析し、景観整備に関する提案をした。この時の学生の提案は、多岐にわたっていた。

その中で、桑折町のまちづくり計画にとりあげられたものがあった。2021年3月付けの「歴まちさんぽ提案書」(桑折商工会 2021)に掲載された、「建物の外観誘導」「色彩のコントロール」「県道の再整備」の3点である。学生たちは、旧奥州街道沿いにある建物の外観をより古い時代の建造物のそれと似せることが出来るように提案していたのであった。同じ年に、桑折町を学びの場としている福島大学と宮城学院大学の学生たちも、同様のまちづくりの提案を行い、上記3点の提案は、3大学の学生たちに共通したのものであった。これに加えて、

沿道沿いに植物を取り入れた風景を形成するという発想も、まちづくり提案書に取り入れられた。

こうした学生の提案の採用は、学生のその後の学修や就職活動に肯定的な影響を与える。少なくとも、一つの町のまちづくり計画に、自分たちが考えた提案が取り上げられているというのは、自身が学んできたことやそれによって形成されている自分自身を肯定的に捉えることに繋がるのである。

学生たちの提案のほかに、「歴まちさんぽ提案書」(桑折商工会 2021)は、「まち中みちの駅」をコンセプトに、旧街道沿いに残る土蔵を利用してのもてなしや宿泊施設運営も提案している。これらは、既に町の人々が行って来たことを発展させた形での提案である。

しかし、この提案にあるまちづくりは、2021年2月及び2022年3月の大規模震災でほぼ不可能になってしまった。町のメインストリートの様子は一変することとなった。

4.2. 2021年度の演習

2021年度の演習では、桑折町でおこなれてきたビジターたちに対するもてなしやまちづくりのために桑折町が持つネットワークについて、学生たちが調査した。桑折町に到着後、商工会の人々に出迎えられた学生たちは、町役場へ向かい、都市計画についての説明を受け、町についての知識を深めた。その後、女性団体連絡協議会の人々により、桑折町の食材を使った昼食を御馳走になった。これまでも、女性団体連絡協議会のメンバーは、折に触れて桑折の食材を用いた食事を作り、ビジターたちに提供してきた。それぞれの家庭の味が生きた桑折町ならではのもてなしである。

昼食後、商工会で、まちづくりや町で行って来たイベントについての説明を受けた。次の日は、名所巡りツアーの行程に含まれる西山城址や旧奥州街道沿いの史跡と町の特産物を製造、販売している店を訪れた。また、献上桃を栽培

している農家で、摘果体験の傍ら、町外から桑折の桃農家になることを目指して桑折に住み始めた移住者にインタビューを行った。

こうした学びの後、金沢に帰った学生たちは、桑折町に関してまちづくりという面から分析し、オンラインプレゼンテーションで、桑折町商工会に集まった人々に対し、彼らの視点を反映させた提案を行った。プレゼンテーションの中で、学生たちは、町の人たちとの触れ合いの中で印象を深めた温かいもてなしや昭和時代を彷彿とさせる旧奥州街道沿いの建造物、「レトロな雰囲気」のある町としての桑折町について議論を深めた。

2021年に学生たちが桑折町を訪れた際には、既に、蔵を含めた古い建物が撤去され、空き地が目立っていた。学生たちは、そうした状況の中での交流やもてなしを目的に、キッチンカーや屋台を出すことを提案した。食に関しては、桑折の産物である桃を使ったパフェなどのデザート販売の可能性について言及した。また、西山城址について、ヴァーチャル・リアリティを用いて城を再現するというアイデアを出した³⁾。

こうして学生たちが出した様々な提案に対し、桑折町の人々はコメントを与えた。また、学生たちの提案の中には、実際のまちづくりを考える際に考慮に入れてもらったものもあった。2022年には、空き地が増えた旧奥州街道沿いで、キッチンカーを出して、ビジターたちをもてなすことが考えられていたのであった。

5. 関係人口としての学生とまちづくり

桑折町は、旧奥州街道沿いの街並みを整備することにより、桑折宿を連想させるような町を作ろうとしてきた。しかし、2021年、2022年と2年にわたり起こった震災のため、町は、旧奥州街道沿いにあった土蔵を失うことになった。土蔵があった土地は空き地になり、旧奥州街道沿いには空き地が目立つようになった。土

蔵こそ、町の人々が旧奥州街道沿いの修景に役立てようと思っていた建物であり、実際、土蔵は、ビジターたちをもてなす場として利用されてきた。桑折町の人々が直面している苦難は、この土蔵が失われたために、彼らが思い描いていた歴史ある街並みを作り出す計画の一部が実行不能になってしまったことから生じる。しかし、土蔵が失われたからといって、旧奥州街道沿いの景観整備は断念せねばならないであろうか？

コミュニティが置かれた状況は、時間を追うごとに変化していく。2021年、2022年と続いた大災害もその変化の一部であるし、東北自動車道の桑折ジャンクションの開設もそうである。それ以外にも、町を取り巻く状況は変化し、町の中にも変化は起こる。こうした変化に対応するまちづくりは、常にプロセスの中にある。その中で、外部から学びに来る学生たちを受け入れ、彼らの視点から提案をしてもらい、その提案を住民たちの間で検討し、可能なものは取り入れてまちづくりをしていくことは、一つの選択肢となり得る。

桑折町が持つ様々な関係人口の中で、学生たちは、総務省(2018)の関係人口区分の中の「風の人」に当たるだろう。藤代(2014)は、「風の人」とは、定住人口とは異なり、ほかの地域から「風を運び、風を起こし」去っていく人であるとする。彼は、「風の人」を常に地域に入れることの重要性を強調する。「風の人」は、外部者の立場から、地域に新しい視点を導入したり、変化を起こす存在であるからである。学生たちを藤代の言うような「風の人」として捉えようと、彼らは、大きな風は起こせないが、そよ

風程度のささやかな風を地域に起こすことができる可能性を秘めた存在であると言える。

学生たちは、町の人々が持たない外部者の視点から町の魅力を「発見」でき、その世代特有の視点からのまちづくりに関する提案を行うことができる。また、若い世代特有の行動様式や感性から、桑折に関する情報発信もできよう。敷田(2009)がよそ者による地域創生への貢献について述べるように、地域の人々が持たない視点や考え方、情報からまちづくりに貢献できる可能性を持つのである。

そして、学生たちにとっての桑折町は、学びの場であり、将来のキャリア形成につながる経験を提供する場である。桑折町では、今まで町役場と商工会、住民が共に主体的にまちづくりのため活動し、多様な試みを行って来た。また、いくつもの大学から、教員と学生たちが訪れ、そうした学生たちの視点をまちづくり計画の中に取り込んでもきた。こうして町が行ってきたことは、学生たちの学修材料ともなる。桑折町は、学生にとってまちづくりを学ぶ場であるのだ。こうして、学生たちが、まちづくりを学びつつ、プロセスとしてのまちづくりに参加すれば、町の人々との間で、相互に利益を得る関係が成立するのではないだろうか。

謝辞：

2020年度以来、3年に渡って金沢星稜大学人文学部の観光学系演習のために、学生を受け入れて頂いた桑折町町役場、商工会、女性団体連絡協議会、ふるさとエール桑折、桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会、そして住民の皆様にご感謝の意を表す。

注

- (1) この地図は、国土地位院の地図 (<https://maps.gsi.go.jp/#13/37.859359/140.506611/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c0g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0>) をもとに、筆者が加工、作成した。
- (2) 陸合、半田、伊達崎地区は、県の施策を待って都市計画が作成される予定である。
- (3) 本論に掲載するにあたり、本文中にある提案と発表を行った学生たちに連絡し掲載の許可を得た。

引用文献

- 川端亮, 佐藤功, 宮前良平
2021 「関係人口からみる大学の地域とのかかわり：西与市野村地域における事例」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』47:75-94。DOI: <https://doi.org/10.18910/79070>。
- 桑折地区歩いて楽しめる地域づくり懇談会桑折部会編
2010 『桑折学のすすめ—郷土愛を育むために—』福島県北建設事務所企画管理部企画調査課。非売品。
- 桑折町政策推進課歴史まちづくり係編
2016 『桑折町歴史風致維持向上計画』桑折町。桑折商工会
- 2021 「歴まちさんぽ提案書—時が醸す豊かな暮らし方『桑折の作法』を実現する—」県道道路景観デザイン提案。
- 厚生労働省
2021 『令和4年度版厚生労働白書（令和3年度厚生労働行政年次報告書）』厚生労働省。
- 藤代裕之
2014 「地方創生のカギ握るネットでつながる『風の人』」『日本経済新聞』2014年10月10日。 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO78109370X01C14A0000000/>。2022年10月8日閲覧。
- 福島県県北建設事務所
n.d. 「『奥州街道・羽州街道追分』復元により, さらに地域づくり活性化」 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/79589.pdf>。2022年10月8日閲覧。
- 福島県桑折町
2021 『桑折町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン』福島県桑折町。
- 福島県企画調整部統計課
2022a 『令和元(2019)年度福島県市町村民経済計算年報』
2022b 『福島県の推計人口（令和2年版）』
- 福島県災害対策本部
2012 「平成23年東北地方太平洋沖地震による被害速報（第800報）」（平成24年12月4日8時00分現在）。
- 2021 「令和3年2月13日震度6強及び2月15日大雨・洪水・防風警報による被害状況速報第55報」（2022年3月8日14:00現在）。 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/498523.pdf>。2022年10月8日閲覧。
- 2022 「令和4年3月16日震度6強による被害状況速報〔第49報・最終報〕」（2022年9月14日11:00現在）。 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/531848.pdf>。2022年10月8日閲覧。
- 「物置のピアノ」製作委員会
2014 『物置のピアノ』DVDビデオ。「物置のピアノ」製作委員会。
- 出入国在留管理庁
2022 「特定技能における受入れ見込み数の見直し及び制度の改善について（令和4年8月30日閣議決定）」『入管政策・統計』 https://www.moj.go.jp/isa/policies/ssw/03_00027.html。2022年10月8日閲覧。
- 敷田麻実
2009 「よそ者と地域づくりにおけるその役割に関する研究」『国際広報メディア・観光ジャーナル』9:79-100。
- 総務省
2018 「関係人口とは」『地域への新しい入り口—関係人口ポータルサイト—』 <https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html>。2022年10月8日閲覧。
n.d. 「総務省モデル事業の取組事例」『地域への新しい入り口—関係人口ポータルサイト—』 https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/model_list.html。2022年10月8日閲覧。
- 高橋博之
2016 「都市と地域をかきまぜる—関係人口が創る新しい地域社会」『調査研究情報誌ECPR』2:3-12。
- 田中輝美
2021 『関係人口の社会学—人口減少時代の地域再生—』大阪大学出版会。

